

パブリックコメントの実施状況について

○実施期間：平成 28 年 10 月 14 日（金）～11 月 2 日（水）

○意見及び提案者数：2 人

○意見及び提案件数：3 件

No	項目またはページ数	意見の内容	意見等に対する本市の考え方
1	<p>P 5 6</p> <p>【実現に向けての主な取り組み】</p> <p>7 熱回収施設の周辺地域における環境整備の促進</p>	<p>1 名称の変更について</p> <p>桜ノ目には、大崎地域広域行政事務組合が運営する施設、大崎広域中央クリーンセンター（ごみ処理）、大崎広域中央リサイクルセンター（資源ごみ処理など）、小動物焼却施設などがあります。</p> <p>今回の施設整備（新設）は、西部地区熱回収施設（ごみ焼却、国庫負担金申請などで熱回収施設とすることがあります。）及びリサイクル施設です。仙台などの自治体でも、ごみ処理施設等施設の表示・広報活動では熱回収が主たる目的でないため、住民などが理解しやすい名称を使っておりますので、総合計画中間案の第 6 章第 4 節実現に向けた主な取り組みの 7 中「熱回収施設」を「ごみ処理施設等（西地区熱回収施設等）」と改めていただくようお願いします。</p> <p>1）総合計画中間案の第 6 章第 4 節実現に向けた主な取り組みの 7 中「・・・周辺地域における環境整備」の後に「、地域振興ビジョンの推進」を加える。</p>	<p>現在作成中の「大崎市西地区熱回収施設等地域振興ビジョン」のねらいとして、『地域の生活環境の改善・向上』、『地域特性を踏まえた雇用・居住・交流の促進』が含まれており、検討内容の主たる要素となっており、平成 27 年 6 月 15 日に桜ノ目地区会より提出された「西部地区熱回収施設及びリサイクル施設整備事業計画書」の要請書にも地域振興が明記されているため、実現に向けての主な取り組み 7 を「廃棄物処理施設の周辺地域における環境整備と地域振興の促進」に改める。</p> <p>なお、第 4 章第 3 節等への追記は、ビジョン自体を現在検討中であり未確定であること、このビジョンがエコタウン整備事業として実施計画、そして重点プロジェクトとして横断的に取り扱われることになることから行わない。</p>

No	項目またはページ数	意見の内容	意見等に対する本市の考え方
2	P 4 4 第 4 章活力あふれる 産業のまちづくり	<p>2 大崎市西地区熱回収施設等周辺地域振興ビジョンの取扱いについて</p> <p>桜ノ目地域は、ばい煙・悪臭には悩まされ、地域振興・快適な住環境等が阻害されてまいりました。今後も影響を受けることとなります。このような中、ごみ処理場等の必要性を理解しつつ、臨時総会を開き、地区会から先進的なまちづくりをして頂くことになれば理解するとして要請を行ったところです。</p> <p>現在、大崎広域西地区熱回収施設整備等・周辺環境整備推進協議会（法定）で桜ノ目地域のまちづくり（地域振興、環境整備等）について学識経験者にご指導を頂きながら進めており、平成 29 年 2 月頃に構成市町長等に報告される予定となっております。そこで、その報告書「仮称、大崎市西地区熱回収施設等周辺地域振興ビジョン」が大崎市総合計画・実施計画等に明記され、各事業が確実に実施されるよう願うものです。間違っても過去のように計画に入れたが、西地区熱回収施設整備等後に梯子を外すことがないよう願うものです。</p> <p>2) 報告される大崎市西地区熱回収施設等周辺地域振興ビジョンの内容によっては、第 4 章「活力あふれる産業のまちづくり」第 3 節等、実現に向けての主な取り組み中の下段に、西地区熱回収施設等周辺地域振興ビジョンの推進を加える。</p>	No 1 の回答のとおり。

※第 6 章第 4 節【実現に向けての主な取り組み】

7 廃棄物処理施設の周辺地域における環境整備と地域振興の促進

No	項目またはページ数	意見の内容	意見等に対する本市の考え方
3	P 4 (4) 深刻化する環境問題と循環型社会の形成	<p>循環型社会を語る時、避けて通れないものとして“生活の基盤”という言葉があると思います。</p> <p>上記の「本市には、国の天然記念物に指定されているマガンやヒシクイが飛来する中世以後の原風景が残る湿地や栗駒国定公園に位置する温泉郷など、景観を含む貴重な自然資源」は、確固とした暮らしから派生した環境の一現象であり、目を向けるべきは、それらを生み出した生活の基盤であると考えます。また、“循環型社会の形成”とは、「ごみの減量化やリサイクルの促進、不法投棄防止対策などに積極的に取り組む」ことではなく、そのような問題の派生しない、過不足なき充足感に満ちた暮らしを構築することではないでしょうか。</p> <p>それはある意味、一次産業に従事し、額に汗して日々を過ごせば暮らしが成り立つという経済現象でもあり、真の循環型社会を目指すのであれば“必要なものが必要な分あれば、あとは要らない”という社会全体の知恵を地域で共有できた一昔前の良き時代を復元し、国策に頼らない、大崎市独自の一次産業に対する手厚い保護が無い限り実現不可能であり、循環型社会の形成というよりは“循環型社会の遺産継承“という文言が適切なように思えます。</p> <p>循環型社会という言葉の、自然・環境に優しいという冠をつけるための形容詞的使用は慎むべきで、真に実現するには相当の覚悟、時代を遡るだけの知恵と勇気が無ければ成し遂げられません。</p>	<p>御意見をいただいております「4 深刻化する環境問題と循環型社会の形成」につきましては、計画策定の背景として、現況を記載しております。</p> <p>御意見のとおり、先人の生活文化の中ではぐくまれてきた、環境へ負荷を与えないような社会全体の知恵を、将来に継承していくという考え方は必要であると考えます。</p> <p>一方、利便性や生産性を求め続けてきた結果、その負の部分として発生してきたのが、ごみの増加や地球温暖化といった問題です。</p> <p>御承知のとおり、市内には、自然環境の復元や保護活動を行っている方々がおり、市としても取り組みを行っておりますが、直面している課題として「ごみの減量化やリサイクルの促進」も避けては通れない問題であると考えております。</p> <p>なお、いただいた御意見は、環境に配慮したまちづくりの参考にさせていただきます。</p> <p>また、温泉療養プランにつきましては、平成 14 年に観光協会で立ち上げた温泉療法プランについては、リピーターが定着せず、利用者が減少傾向となったようです。</p> <p>温泉を活用した療養は、病院事業としては難しいものと考えております。しかし、市の「観光」や「健康」を目的とした温泉の活用策については、今後の検討課題になるものと考えております。</p>

	<p>福島県三春地方に“三春四里四方”と云う言葉が残されています。三春を中心とした16キロ圏内で生活が賄えたということであり、賄うに足る環境が整備されており、それを実現可能にした生活の背景や暮らしの知恵が存在したということでもあります。</p> <p>現在では夢のような話ですが、この考えを暮らしの中に実践する地域創りを目指すのであれば、立派な大崎市の特性にはなるでしょう、所謂、「里山特区」として。</p> <p>その可能性を探るために、志ある者たちを旧一市六町から応募し、交流を深めることも一体感の醸成に繋がると思いますが如何でしょうか。</p> <p>循環型社会の復元を目指している団体は、市内にも数多くあると思います。</p> <p>“我々は、このような処で、長い間、種の保存を営んできたという経過の上に、今が在る．．．しかも、そのところどころの、違ったやり方で”。このような思考の共有無くして、一体感の醸成は為しえないと考えます。</p> <p>そういうものが暮らしの中に色濃く見られるということが、その地域の特性ということではないでしょうか。大事なことは、特性を強靱なものにする、行政と住民とが一体となった地域独自の事業展開です。</p> <p>鳴子町時代の平成十四年、観光協会内に立ち上げた温泉療養部会も、強靱な地域の確立を目指したもので、根底に、基本構想、基本方針、基本計画、実施計画の四つの柱がありました。</p> <p>「鳴子を訪れる方々に、健康を取り戻す環境の準備」を</p>	<p>新公立病院改革プランの病院のあり方について、今年度中に策定を予定している新公立病院改革プランでは、鳴子温泉地域における将来の人口の推移等を見ながら、病院の適正な規模を検討しております。高齢化社会は、地域住民だけでなく、医療を担う医師、看護師等の確保にも大きく影響しています。地域医療を守る分院として、診療所化は考えておりませんが、地域の「かかりつけ医」を担う役割と鳴子を訪れる観光客の「安心・安全」を目的とした良質な医療の提供を行うため、持続可能な病院の運営を目指したいと考えております。同時に現在の鳴子温泉分院は、建物が老朽化しておりますことから施設整備についてもあわせて検討しております。</p>
--	---	---

		<p>基本構想に据え、常に変わることなき方針に、「それぞれの異なる泉質と文化に立脚した地域の再構築」を謳い、「温泉の療養的活用」を計画の柱とし、病院との提携で療養プランを実施するというものでした。</p> <p>実施母体である温泉療養部会を設立した当時、鳴子は観光一辺倒で団体旅行が途切れることなく、街は異様に賑わい施設は巨大化し、地域を支えた温泉をみれば「入っても入らなくても良い」程度に酒席の隅に押しやられている状態で、社会全体が“時代の表層を漂う一過性の流行”を追い求め蠢いているという状況でした。</p> <p>そこには地域の理念など無く、あるのは経済効率最優先という刹那的なもので、地域力という観点からすればまだ余力がありましたが、今の鳴子にそれが残っているでしょうか。</p> <p>免疫学者・多田富雄さんの「免疫の意味論」に、次のようなセンテンスがあります。</p> <p>“免疫は、病原性の微生物のみならず、あらゆる「自己でないもの」から「自己」を区別し、個体のアイデンティティを決定する。還元主義的生命科学がしばしば見失っている個体の生命というものを理解する一つの入り口である。</p> <p>臓器移植、アレルギー、エイズなどの社会問題もまた、身体的「自己」の、「非自己」との係わりの問題として考えなければならない”</p> <p>文中の「自己」を「地域」に置き換えてみると、鳴子の現状を的確に読み取ることができます。</p>	
--	--	--	--

		<p>もともと存在した「地域」が、外発的な、進出を目論む「非地域」に同化せざるを得ない状況が現在の鳴子で、原因は、免疫力の低下に他なりません。</p> <p>低下した免疫力は、他者から識別困難という状況を生み出します。</p> <p>先日、テレビ番組に市原悦子さんが出演していましたが、表情や話しぶりに“この人は幾つになっても市原悦子だ”と感じたものです。アイデンティティに、ぶれが無いのです。今の鳴子はどうでしょう。</p> <p>いつ来ても鳴子だと感じるものはだいぶ減りましたが、たった一つ昔も今も感じる温泉の香り。復元の鍵ではないでしょうか．．．鳴子の、根太い温泉力。</p> <p>その、療養的活用を担う病院の経営が思わしくない旨を、10月30日の「第二次大崎市総合計画」の説明会の中で知り、私の中で大きな疑問が生まれました。</p> <p>経営的観点からすれば、維持できないものは縮小か廃止になるのですが、悪化する数字の先にあるものは、それを裏付ける“人々の暮らし”です。</p> <p>行政の病院です。観光地に位置する病院です。</p> <p>悪化を辿る経営というだけで判断できるものではないと思います。暮らしの根幹を支える、“医”の崩壊は、何が何でも防がねばなりません。</p> <p>“私たち市民は「ずっと大崎に住み続けたい」という愛着と誇りをもち続け、市外の方々からは「いつかは大崎に行ってみたい・住んでみたい」と憧れをもたれる「宝の都（くに）・大崎」”</p>	
--	--	--	--

		<p>この言葉を支えるものがなんであるのか．．．再考した いものです。平成十八年。突然の「鳴子分院診療所化」 のような悔しさは、二度とご免です。 療養客がぶつりと途切れたものです。 では、何故、経営が厳しいのでしょうか。 簡単なことではないでしょうか。 良い医者が居ない．．．治らないからです。 鳴子分院のホームページに「東北有数の規模を誇るリハ ビリ・ケア機能」を謳っていますが、開所当時の活力は なく、寂しい限りです。温泉療法医、整形外科医の常駐 は必須ではないでしょうか。 何処に行ったのでしょうか、歩行訓練用の立派なサンルー ムをあんなにも歩いていた人達。 今よりましな明日を信じ、汗を流して機能回復に励んだ 人達を、この日本は、必要としなくなったのでしょうか。 平成18年の診療報酬大幅削減に端を發した社会現象、 リハビリ難民の増加。他所はどうあれ、“大崎・鳴子の 医療体制はこれで行く”という、核を明確に宣言してこ そ、温泉に支えられた地域が温泉に恩返しすることにな るのではないのでしょうか。 一緒に、汗をかきたいものです．．．惜しみませんから。</p>	
--	--	--	--